

辛亥革命以前の陳独秀

——『安徽俗話報』を中心にして——

里 見 信 也

はじめに

- 一、『安徽俗話報』の発刊とその性格をめぐって
- 二、亡国の危機をめぐって
- 三、西洋の理想化と進化論の応用
むすびにかえて

はじめに

陳独秀が新文化運動の推進者として、また中国共産党設立の中心人物として、中国の近代史上に残した足跡はきわめて大きい。

しかし、陳に対する評価は、一般的にあまり高くはない。それは、国民革命を敗北に導き、その後トロツキズムにはしり党籍を剝奪されたことに起因する。そのために陳独秀の生涯そのものが、すべて否定されてしまっている。新島淳良氏は、陳の五四運動以前のたたかいのなかに存在した「欠陥」、つまり西洋の近代にあらゆる長所を見

出し、それとの比較のなかで中国の近代のすべてを短所と考え、西洋内部の思想的対立には目をむけなかったという短絡的な歴史認識が、その後の彼の実践活動のなかで修正されることがなかったために、陳は革命から脱落していくことになったと論じた。^①

宇野重昭氏は、陳が理解した西洋とは民主主義と科学に集約された、中国近代化の万能薬としての世界であり、また歴史の実体、例えば、自由・平等・博愛に基づく近代的ヒューマニズムがどのようなプロセスを経て確立されたかという点がまったく問題にされていないと評した。^②

新島・宇野両氏に代表されるように、従来の陳独秀研究の特徴は、彼の革命あるいはマルクス主義者からの脱落の原因を、五四運動以前（陳がマルクス主義を受容する以前）^④における彼の思想形成過程に存在していた「欠陥」——西洋思想受容における皮相性——にもとめて、彼の思想的営為のすべてを否定し去っているところにある。^⑤

しかし、このような陳の評価とその方法、つまり陳がマルクス主義者から逸脱した原因とそれに起因する彼の評価を、五四運動以前の彼の思想性にものみとめる方法は正しいであろうか。五四運動にいたるまでの陳の言動を検討するならば、横山宏章氏がすでに指摘しているように、陳は政治家・革命家というよりは、むしろ国民の意識革命をはかろうとした啓蒙家であったといえる。陳をこのようにみるならば、彼がマルクス主義者から脱落していった原因を、彼の啓蒙思想のなかに見出すのは不可能ではないだろうか。革命からの脱落の眞の原因をもとめようとするなら、彼の思想の営為の過程にもとめるよりも、むしろマルクス主義者としての時期の彼の思想構造および指導性に分析を加えるべきである。^⑦ また、その思想形成のうえで「欠陥」が存在したというのなら、どうして毛沢東をして「五四時期の思想界の明星」^⑧といわしめるほどの評価を受けたのであろうか。

とりわけ陳独秀の思想を考へるうえで重要なことは、彼の理論がなぜ新文化運動を推進し、かつ当時の社会のな

かにあつて指導的な理論として機能しえたのかということである。つまり彼と、彼を必要とした社会とのかわり、および革命実践の具体的な歩みを詳しく分析することによってこそ、はじめて陳の総体的な評価がくだしえるであろう。

以上のことをふまえ、本論では『安徽俗話報』を中心に、辛亥革命以前の陳独秀の思想の特徴を垣間見ることにする。

一、『安徽俗話報』の発刊とその性格をめぐって

安徽省の蕪湖で発刊された『安徽俗話報』は、一九〇四（光緒三十）年二月十五日の創刊から翌年八月に発禁されるまでのおよそ一年半の間に、二十二期（二十一期と二十二期は合併号である）まで出版された。

この時期は、巨視的にみると地球上が新たな世界を模索し、胎動しはじめたときであった。すなわち、二十世紀は帝国主義支配体制の成立とともににはじまり、全世界はほぼ抑圧体系としての帝国主義と、それに対抗する被抑圧体系としての植民地・従属国という対立構造を鮮明にした。このような状況のなかで発生した一九〇五年のロシア第一革命を契機に、革命運動・民族運動の潮流が世界的な広がりをもせるようになった。^⑧

中国においても、同様であった。革命の気運が次第に高まり、一九〇五（光緒三十一年）年までには、反清の革命派が一定の社会的勢力を獲得するようになった。同盟会の成立は、その象徴であったといえよう。^⑩

国内の革命的潮流を高揚させた要因のひとつは、ツァーロシヤの東三省占領に反対する拒俄運動である。安徽省においても、清朝政府とロシアとの密約調印（一九〇二年四月）のニュースが伝わると、留日学生であった陳独秀はただちに安慶にもどり、この年、柏文蔚・鄭贊丞らとともに青年勵志学社を結成した。青年勵志学社は、拒俄義

勇隊を模倣してつくられたもので、社員軍事訓練をおこなう一方、清朝政府の売国政策を厳しく糾弾するようになる。この青年勵志学社は、一九〇三（光緒二十九年）年には清朝政府の弾圧により解体を余儀なくされたが、柏文蔚らは、安慶の武備学堂練軍に入り、活発に革命活動を展開した。さらに一九〇五年五月、李光炯^⑭が、教育の普及と革命勢力の培養を目的に、長沙に開設していた「安徽旅湘公学」を「安徽公学」と改めて、それを蕪湖に移すと、陳独秀をはじめとする蘇曼殊^⑮・劉師培^⑯・柏文蔚・陶成章らの活動家が続々と結集しはじめた。このため、蕪湖は安徽省における革命活動の拠点となり、「安徽公学」は「安徽革命の温床」と呼ばれるようになった。『安徽俗話報』が出版されたのはちょうどこの時期にあたり、安徽の革命勢力を育成するのに大きく貢献したといわれている。^⑰

『安徽俗話報』は月に二度（一日と十五日）発刊され、一部五十銭で販売された。創刊当時は販路も狭く、発行部数は一千部程度であったが、半年後には三千部をこえるようになった。^⑱ また、販売地域も南京・上海・鎮江・揚州・武昌・南昌・長沙などの他、遠くは遼東にまでおよんだ。^⑲ この時期は、全国的にも白話報の出版ブームであった。そのなかで、『杭州白話報』は白話報の先陣をきったことで、上海で出版された『中国白話報』は革命鼓吹の白話報としてそれぞれよく知られているし、『安徽俗話報』は、出色の白話報として評価された。^⑳

陳独秀はこの『安徽俗話報』の総編集および主筆として活躍し、当時、二十五歳であった。誌上では主に「三愛」のペンネームを用いて多数の論稿を執筆している。

「安徽俗話報発刊の理由」（『安徽俗話報』第一期—以下『安徽』—と略称する）によれば、創刊の理由を次のように記している。

現在出版されている日報・旬報は少なくないが、すべて深遠な文章で、「之」・「乎」・「也」・「者」・「矣」・「焉」・「哉」という文字だけが、紙面いっぱいに溢れている。学識のない人が、どうしてそれを理解できようか。

このように考えるならば、平易で理解しやすい白話で紙面を埋めた雑誌を創るのが、最もよい方法であろう。²⁴⁾しかしながら、このような白話報発刊の理由は、何も『安徽俗話報』だけに限ったことではなかった。前述の『中国白話報』や『杭州白話報』など、すべての白話報に共通するものであった。

それでは、『安徽俗話報』はいったい如何なる特徴をもっていたのか。一般的には、革命派に属する雑誌とされているが、²⁵⁾問題はここであるという革命の意味である。

創刊号の「安徽俗話報の章程」の説明では、この白話報は「論説」・「要緊の新聞」・「本省の新聞」・「歴史」・「地理」・「教育」・「実業」・「小説」・「詩詞」・「問談」・「行情」・「要件」・「來文」の十三のコーナーからなっており、そのなかでも特に娯楽性に重点が置かれたことが、第一の特徴となっている。「小説」の項目説明では「ここでとりあげるのは人情・世故・佳人・才子・英雄・好漢のはなしであり、あの『水滸伝』・『紅樓夢』・『西廂記』などと比べてもさらにおもしろいので、どうかみなさん読んで下さい」と宣伝し、「問談」の項目説明でも「古代・近代・本国・外国のおよそ不思議なあるいは愉快な出来事を随意に書きあらわしており、皆様が暇ですることがないときは、これを読んで気を晴らして下さい」とよびかけている。『安徽俗話報』が、ただ単に革命を鼓吹するだけのものではなかったことが理解できる。

第二の特徴として、実用的な話題を提供している点にある。例えば、「実業」の項目においては、「農民・労働者・商人を問わず、新しいうまい味のある金儲けの方法を皆様に教えましょう」と述べ、「行情」では、金儲けのために、内外の相場の変動を詳しく教えると紹介している。²⁶⁾まさに民衆の生活に密着した内容が、ここに書き綴られている。

この他、読者の興味をひくためのさまざまな工夫が随所になされている。いかに理論的で格調の高い内容の白話

報をつくり、革命を鼓吹したところで、それが民衆に読まなければ何の意味もない。まず彼らに文字に触れる機会を提供する。そのために白話を用い、かつ娯楽性や実用性に富んだ内容にする必要があった。「教育」の項目説明における「貧民や女性・子供に勉学の方法を教える」という一節からは、読者層がまさに無知文盲の子女をも含んだ広範な民衆におよんでいたことがうかがえる。つまりこの『安徽俗話報』における革命とは、士大夫階級に独占されていた知識の解放という文化的な意識革命であり、陳がこの白話報のなかで最も重視したのは、民衆を啓発することであった。その意味において、陳の革命活動は啓蒙活動そのものであったといつてよい。

二、亡国の危機をめぐって

陳が『安徽俗話報』の論稿のなかで、最も重点を置いたのは「論説」である。第一期創刊号の「瓜分中国」、「悪俗篇」（『安徽』三・四・六・七・十二・二十・二十二）、「説国家」（同前五）、「亡国篇」（同前八・十・十三・十五・十七・十九）などの論説は、当時の政局や社会問題を鋭く分析している。その一例として「安徽の鉅務を論ず」では次のように語っている。

われわれ中国人の命脈がいったい何か御存知か。それはすなわち各地の鉅山である。鉅山とは地中の宝物・全国の精華で、すべて自分達で開鉱しなければならぬ。どれひとつとして外国に譲り渡してはいけない。

この他、陳の代表的な論稿として「地理略」（同前三・五・七）、「国語教育」（同前三）、「西洋各国小学堂の情形」（同前十八）、「東海兵魂録」（同前八・九）、「中国兵魂録」（同前十七・十八・二十）、「黒天国」（同前十一・十三・十五）などを挙げることができる。そこでは、政治・経済をはじめ地理・教育・軍事・小説にまで説きおよんでおり、彼の卓越した識見が鮮明にあらわれている。

これらの諸論稿を通してまず指摘できることは、帝國主義列強の侵略と清朝政府の売国政策による亡国の危機感に強く支えられていることである。とりわけ、義和団運動鎮圧に名を借りたツァーロシアの東三省占領が、他の知識人と同様に、陳にも帝國主義列強の脅威を痛感させた。彼は「瓜分中国」のなかで次のように述べている。

われわれ数千年来の祖宗相伝のすばらしい中国は、まさに瓜を切るが如く、お前はここ俺はここと分割されようとしている。このことをすなわち「瓜分中国」と呼ぶのである。彼らの企てによると、ロシアはすでに東三省を占領して、さらに直隸・山西・陝西・甘肅を占領しようとしているし、フランスは雲南・貴州・広西を、日本は福建を、イタリヤは浙江を各々占領しようとしている^⑤。

このように、分割統治されようとしている中国の現状をとらえ、亡国とは「土地・利権・主権を外国に奪い去られる」^⑥（「亡国篇」）ことであると鋭く分析した。

陳独秀の啓蒙運動は、帝國主義列強の侵略を前にして、危機意識のまったく欠如した民衆に自覚を与えることから開始された。陳によれば、列強による「瓜分中国」という状況を招いたのは、もとより腐敗墮落した清朝政府にあるが、この期におよんで国体や政治に無関心な国民にこそ、その主要な原因があるという。そこで、陳はまず無自覚な国民を厳しく批判した。

われわれ中国人は家のことはよく知っているが、国家の欠陥を知らない。これはまさにユダヤ人が家のことは知っていても、国のことを考えないのと同じである。それ故、全国四億の民は一身一家のみを守り、一国の土地・利権・主権が外国に奪われようとしている現実をまったく知ろうとしない^⑦。

このように陳は、自分達の利益のことしか頭になく、国家のことを考えようとしない民衆を容赦なく糾弾した。しかしながら、この時期にあって亡国の危機を民衆に強く訴えたのは、何も陳独秀一人に限ったことではない。

『安徽俗話報』における陳の亡国論に先駆けて、全国各地で革命派あるいは変法派の別を問わず、すでにより明確に、より先鋭的に論じられている。多くの開明的な知識人は、このような亡国の危機を訴えることが、国民を覚醒させるうえで最も有効性があると認識していたのと同時に、みずから亡国の危機を自己の内に強烈に意識していた。

それでは、彼らと陳独秀との間には、その理論の展開において、当時いかなる相違が存在していたのであろうか。特に、この時期の陳独秀の論調と相似する部分が多数見受けられる陳天華と、彼とを比較することによって、陳の特異性を明らかにしておく。

共通点として挙げられることは、まず第一に両者とも平易な白話文の体裁をとって執筆している点にある。このことから、読者が広範囲にわたっていたこと、民衆を啓蒙することに重点が置かれていたことがうかがえる。第二の点は、亡国の危機を説いて民衆に自覚を与えようとしたことである。^⑧ インドやポーランドなど、国をなくした外国の事例をとりあげ、中国の直面している亡国は、今までの単なる王朝の交替とは異なり、民族の滅亡にまでおよびとする。

両者に差異があらわれるのは、その後の理論の展開においてである。陳天華は、亡国の最大の原因を、帝国主義勢力と屈辱的な妥協をはかることによって自国を保全しようとする満州政府に向け、民族的・人種的自覚をもった漢民族による排満革命、すなわちデモクラティックな政治主義的排満革命を主張するところにある。^⑨ このことは、清朝政府との妥協をまったく許さず、完膚なきまでの満人政府および立憲派・洋務派への批判となってあらわれる。一方、『安徽俗話報』にみられる陳独秀の論稿においては、亡国の危機を招いた最大の原因は、自覚のない民衆に置かれ、排満的な清朝政府批判はほとんどみられず、また具体的な政治革命にもまったく言及されてはいない。

しかし、これによって陳独秀の思想が陳天華よりおくれていたと考えるのは早計であろう。まさに崩壊せんとする祖国の現状を目のあたりにして、彼を奮い立たせたのは愛国心とそれを基底とした危機意識であった。徒手空拳に等しい一青年にできることなど限られている。清朝支配体制の支柱である伝統思想が死滅せず、しかもそれかわる新しい価値観が存在しないときに、陳独秀は民衆に自覚を与えること、換言すれば、伝統的支配体制の束縛からの個の確立をもとめることが、亡国の危機から祖国を救うことになると考えた。彼はいう。

亡国の原因がいったどこにあるか御存知か。それは皇帝がよくないとか、役人が悪いとか、兵力が弱いとか、財力が乏しいとか、外国にだまされているとか、土匪が反乱を起こすとかいったものとは違うのである。わたしの考えでは、およそ一国の興亡は、国民としての性質がよいかわるいかにかかっている。しかしわれわれ中国人は、生まれながらにして悪しき性質をそなえている。これがすなわち亡国の原因である^⑤。

ここから、陳独秀が政治革命に先行して、民衆一人一人の意識革命をはかろうとした啓蒙家であったことが理解できる。

清末における啓蒙家を定義づけることはなかなか難しいが、一般的に啓蒙家とは、士大夫階級の立場に立脚し西洋思想を観念として受け入れ、それを紹介した人物であり、革命家や政治家に比べるとかなり否定的にとらえられている^⑥。しかし、清末の半封建・半植民地社会のなかにあって、封建的倫理観の手塚・足枷から脱却できないでいた多くの民衆の「蒙」を「啓」き、未来への指針を示したという功績を考慮するならば、啓蒙家とは、当時の社会的要求の体现者であり、時代をリードしたオピニオン・リーダーとして、革命家や政治家とは別の枠組で評価する必要があろう。

陳独秀の啓蒙家としてのこの姿勢は、その後の新文化運動においてもほとんど変わることにはなかったし、それは

彼の思想をみていくうえでのひとつの指標として、留意しておかねばならない。

三、西洋の理想化と進化論の応用

陳の啓蒙思想は如何なる原理に基づいて、形成されてきたのであろうか。

新文化運動期において陳が理想とした社会が、デモクラシーとサイエンスに集約された西洋であり、その核心を担っていたのが進化論であったことは、これまで多くの論著によって紹介されてきたが、その思想の萌芽は辛亥革命以前にあった。

陳は論説「悪俗篇」(前掲)を中心に頑迷固陋なる旧風俗・旧習慣に対して筆鋒激しく攻撃を加えたが、その武器としたのが理想化された西洋であった。彼はいう。

現在、世界万国のなかで結婚の基準は、西洋が最も文明的である。彼らは男女みずから相貌・才能・性情・徳性がつりあっている相手を選んで結婚する。それ故、西洋の夫婦の愛情の深さは、中国人にはとうていおよばない。中国の男性が女性を娶るのは、自分にかわって生まれた子供を育てさせるためにすぎない。中国の女性が男性に嫁ぐのは、男性に頼って生きていくためにすぎない。^④

われわれ中国人は、もっぱら香をたいて菩薩を敬うことが好きだが、むしろ菩薩はわれわれ中国人を守ってくれないばかりか、国事は衰退し、西洋人からの種々の凌辱を受ける結果となっている。一方西洋人は、菩薩などというようなものは信じないし、また香をたいたりするような儀式も一切やらないのである。^⑤

ここにもみられるように、中国の旧制度を否定し、西洋を理想化してとらえる手法は、新文化運動のときの分析視角と同じであり、それは陳の啓蒙思想の重要な部分を占めていた。

また「悪俗篇」のなかで指摘しているように、男女間の平等をはじめとする基本的人権の問題に対するとらえ方は、当時の中国と西洋とでは隔世の感があり、いまおくれた中国が、文明的に進んだその西洋の侵略によって亡国の危機に瀕しているという。彼の思考のなかには、たえず西洋の優越性が絶対的価値として存在していた。そこにこそ、陳の時勢をみることに秀でた慧眼を看取することができよう。

反面、陳のこの西洋を理想化する思考方法は、すでに批判の対象となったように、表面的には「西洋にあらゆる長所を考えて、中国にあらゆる短所を見出す」という二元論的な思考方法に依拠しているのもまた事実である。だがこのことをもって果たして、陳の西洋思想受容の方法は、きわめて皮相的であって、それによってその内部にある複雑な思想構造が分析できないでいいきれるだろうか。陳は、民衆を覚醒して自覚を与えること、すなわち啓蒙としての機能を第一義的に考えていたのである。文字を読むこともおぼつかない無知な民衆を前にして、体系的にとらえられた高度な理論を提示したところで何の役にも立たなかったはずである。陳のこの啓蒙を目的とした論稿のなから、彼の西洋思想受容の方法や、あるいは彼がその思想を如何に咀嚼し構築していたかを理解するのは、きわめて困難であるといえよう。

一方、進化論もこの時期にはすでに陳の思想のなかに包摂されていた。ここで彼の進化論の背景をみておく。周知のように、進化論が一世を風靡し、清末の知識人に大きな影響をおよぼしたのは、嚴復の「天演論」による。しかし、若い知識人層にはむしろ嚴復の旧態依然とした古典の文章よりも、梁啓超の歯切れのよい平易な文章の方がより歓迎されたらしい。^④ 一九〇二年から一九〇三年にかけての梁は「思想が最も著しく変革・革命に接近する」といわれており、そのときに提唱されたのが「新民説」である。梁の「新民説」を貫く根本思想は、近代国家における国民としての自覚を培養することにあった。そのため梁は国民の文明程度、つまり民徳・民智・民力の向上をは

かることが、政治制度の改革よりもさらに重要であると説いた。^④ 陳が進化論を受容し、啓蒙家としての立場を築いたのも、この梁の論説によるところが大きかったと思われる。彼はいう。

この世に存在する如何なる商品にも、よいものとよくないものがある。そのふたつを比べた場合、誰もがよいものは必要とするが、よくないものは必要としない。それが人情というものである。誰もが好むよい商品は、日増しに繁榮していくであろう。しかしよくない商品は誰もが必要とせず、それは日増しに衰微していき、そのうちに消えてなくなり、この世に存在することができなくなる。これがおよそ世界の優勝劣敗の道理である。この道理に基づくならば、われわれ中国が生産する商品と、西洋各国の商品とを比較した場合、どちらがよくて、どちらがよくないかは、皆様がよく御存知のことであろう。^⑤

このようにして、理想化した西洋と進化論とが結合することによって、彼の思想的営為はより高次の統一体へと止揚させられたのである。

ただ、進化論は本来自然法則を説いた科学思想であり、社会をひとつの生物体・有機体とみなすのであるから、その内部にある階級的な対立・闘争という観点が見落されるところという欠点を含んでいた。^⑥

しかし、陳がここで用いた進化論は、あくまでも啓蒙としての枠組のなかにあり、彼は、それを梁の如く政治革命の理論として用い反動化し立憲君主体制を宣揚するようなことはなかった。

望むと望まざるとにかかわらず、中国は抑圧体系と被抑圧体系という「優勝劣敗」の国際環境のなかに位置していた。不適者（中国）が適者（帝國主義諸列強）によって、それは「自然の法則」として淘汰されようとしていたのである。その渦中で、陳は、中国の置かれている環境を悲観して現実から逃避するようなことはなかった。あえて封建的倫理観のなかで淘汰されようとしている民衆の受動的体質を、適者への能動的体質へと転化させるべく要

求したのであった。それは決して列強の仲間入りを究極としたものではなく、抑圧体系に対抗する独立・自主の精神を勝ちとるための闘争であった。つまり、彼がここで用いた進化論とは、民族意識の高揚をはかるための基本的原理に過ぎなかったのである。

こうしてみると、彼の二元論的な思考方法や「適者生存」・「優勝劣敗」に帰結された進化論の理論も、民衆を啓発するという機能に限定されたものであり、逆に単純化された簡明直截な理論のゆえに啓蒙家としての陳を際立たせたといえよう。

むすびにかえて

以上、『安徽俗話報』のなかにおける陳の思想的営為のプロセスをみてきた。結論としていえることは、この時代の陳独秀は、明らかに民衆の「蒙」を「啓」くことをみずからの使命であると考えた啓蒙家であった。時の政府を転覆し、それにかわる新しい国家を建設するという政治革命を目指したのではなく、それに先行するラディカルな革命、すなわち国民一人一人の意識革命を成就しようとしたのである。陳が民衆に要求したのは、決して性急な革命ではなかった。伝統思想の束縛から脱却した民衆が、みずから奮闘努力することであった。

陳独秀を評価するうえで、現実とのかかわりを切り離して考えることは、陳のすべてを捨象してしまうことになる。先見の明が世に尊ばれ、市井を啓蒙し時代の流れを改変するには、余り先を見過ぎてもいけない。その意味においても、単純化された陳の啓蒙思想は時宜を得たものであり、実践において計り知れない作用をおよぼしたことは、五四の大衆運動を生み出したことで明白である。つまり、啓蒙家・陳独秀はこの時代をリードした「思想界の明星」であったといえよう。

註

- ① 新島淳良「五・四時代の陳独秀の思想」(『思想』三八〇、一九五六年二月)
- ② 宇野重昭「中国ナショナリズムの発展とロシア革命の影響」(坂野正高・衛藤藩吉編『中国をめぐる国際政治』東京大学出版会、一九六八年)
- ③ 同じ立場に立脚するものとして、前田浩子「陳独秀の思想」(『寧波史苑』十二、一九六三年)・河田第一「啓蒙的知識人・陳独秀」(『経済理論』一三三、一九七三年)などが挙げられる。
- ④ 陳が全面的にマルクス主義受容を表明するのは、『新青年』八巻一号(一九二〇年九月一日)に載せられた「談政治」においてである。
- ⑤ このような見解はすでに、今井駿「陳独秀と国民革命」(野沢豊編『中国国民革命史の研究』青木書店、一九七四年)や古厩忠夫「陳独秀の虚像と実像」(『歴史評論』三三九、一九七七年)のなかで指摘されている。
- ⑥ 横山宏章『陳独秀』(朝日新聞社・一九八三年)
- ⑦ 今井、前掲論文二八五頁。この観点から今井氏は、国民革命期の陳に分析を加えている。
- ⑧ 王樹楙・李学文・王沛「陳独秀研究綜述」(『陳独秀評論選編』上冊、河南人民出版社、一九八三年八月)一〇頁より再引用。
- ⑨ 齊藤孝「二〇世紀初頭の反帝国主義運動」(『岩波講座世界歴史』二三)参照。
- ⑩ 狭間直樹「辛亥革命」(同前書)参照。
- ⑪ 林增平『中国近代史』下冊(河南人民出版社、一九五八年)五九〇頁。
- ⑫ 字は烈武、安徽省鳳陽県の人。『革命人物誌』第三集(中央文物供应社、一九六九年)参照。
- ⑬ 贊丞は字で、柏文蔚と同じく安徽省鳳陽県の人。同前書、第九集参照。
- ⑭ 名は德膏、光炯は字、安徽省桐城県の人。同前書、第三集参照。
- ⑮ 名は玄英、曼殊は僧名、日本人を母として横浜に生まれる。同前書、第九集参照。
- ⑯ 字は申叔、江蘇省儀徵県の人。『民国人物伝』第一卷(中華書局、一九七八年)参照。
- ⑰ 字は煥卿、浙江省会稽県の人。同前書、第二卷参照。
- ⑱ 当時の安徽省における革命動向に関しては、政協安徽省委員会文史資料工作組「辛亥革命前安徽省教界的革命活動」(『辛亥革命回憶録』第四集)・沈叔「辛亥革命時期的岳王会」(同前『陳独秀評論選編』上冊)などを参照。
- ⑲ 『安徽俗話報』第十二期の「本社廣告」のなかで次のように記されている。「本報発行以来、僅及半載、每期

由一千份、增至三千份、銷路之広、為海内各白話冠」。

- ⑳ 陳万雄『新文化運動前的陳独秀』（香港中文大学出版社、一九七九年）四七頁。沈寂「辛亥革命時期的陳独秀」（前掲『陳独秀評論選編』上冊）九七頁。

- ㉑ 謝俊美「杭州白話報」（『辛亥革命時期期刊介紹』二、新華書店、一九八二年）参照。

- ㉒ 蔡桑蘇「中国白話報」（同前書）参照。

- ㉓ 任建樹・吳信忠・張統模「陳独秀和安徽俗話報」（前掲『陳独秀評論選編』上冊）六四頁。

- ㉔ 『安徽俗話報』第一期、一頁。

- ㉕ 前掲「辛亥革命前安徽文教界的革命活動」三八〇頁、「這個報以口語式的文字、作革命的宣傳、內容又能結合實際、激發人心」および前掲『新文化運動前的陳独秀』四六頁「内容以『開風氣、倡革命』為主」とあり、『安徽俗話報』の革命的性格を強調している。

- ㉖ 『安徽俗話報』第一期、五〜六頁。この十の項目以外に、「兵事」・「伝記」など多数の項目が増設されている。

- ㉗ 『安徽俗話報』第一期、六頁。

- ㉘ 同前、六頁。

- ㉙ 同前、五頁。

- ㉚ 同前、六頁。

- ㉛ 同前、五頁。

- ㉜ 同前、第二期、一頁。

辛亥革命以前の陳独秀

- ㉝ 同前、第一期、十頁。

- ㉞ 同前、第八期、二頁。

- ㉟ 同前、第十七期、四頁。

- ㊱ 島田虔次『中国革命の先駆者たち』（筑摩書房、一九六五年、六四〜六五頁）によれば、この時期の代表的な革命パンフレットを書いた革命家としては、陳天華・鄒容・章炳麟の三人を挙げられるが、そのなかでも陳天華のものが、口語体で書かれ、列強の侵略を強調したという。

- ㊲ 永井算巳「陳天華の生涯」（『史学雑誌』六五―十一、一九五六年）参照。

- ㊳ 『安徽俗話報』第十七期、一頁。

- ㊴ 河田前掲「啓蒙的知識人・陳独秀」。河田氏は、このような観点から、陳の啓蒙的体質を否定している。

- ㊵ 新島前掲「五・四時代の陳独秀の思想」などがそれであるが、本論中で指摘しているように、陳のこの思想は「欠陥」としてとらえられている。

- ㊶ 『安徽俗話報』第三期、四頁。

- ㊷ 同前、第七期、六頁。

- ㊸ 新島前掲「五・四時代の陳独秀の思想」および宇野前掲「中国ナショナリズムの発展とロシア革命の影響」などで指摘されている。

- ㊹ 伊藤秀一「進化論と中国の近代思想」（『歴史評論』一

二三、一九六〇年）四〇頁。

④⑤ 木原勝治「梁啓超の新民説について」『立命館文学』

一八〇、一九六〇年）八二七頁。

④⑥ 同前、八三一頁。

④⑦ 『安徽俗話報』第十三期、一頁。

④⑧ 新島前掲「五・四時代の陳独秀の思想」四〇頁。

④⑨ 伊藤前掲「進化論と中国の近代思想」参照。

（文学研究科博士後期課程・東洋史学専攻）